

学 位 論 文 要 旨

研究題目 (注：欧文の場合は、括弧書きで和文も記入すること)

Usefulness of our proposed olfactory scoring system during endoscopic sinus surgery in patients with chronic rhinosinusitis

(慢性副鼻腔炎患者における内視鏡下副鼻腔手術の嗅裂スコアリングシステムの有用性)

耳鼻咽喉科学・頭頸部外科学 (指導教授 阪上 雅史)

氏 名 岡崎 健

【はじめに】

第 I 脳神経である嗅神経が分布する嗅上皮は、嗅裂と呼ばれる部位に位置しており、嗅裂天蓋、上鼻甲介、中鼻甲介、鼻中隔など多彩な部位に分布する。本研究は、術中に嗅神経分布領域をスコアリングすることにより、術前後の嗅覚への関与、副鼻腔炎における嗅裂の病態について検討することを目的とした。

【方法】

術中の嗅裂部の粘膜所見について、嗅裂天蓋 (鼻中隔側含む)、中鼻甲介 (嗅裂側)、上鼻甲介 (嗅裂側)、上鼻道、蝶形骨洞自然口 (蝶篩陥凹) の 5 か所を、正常 (0 点)、浮腫 (1 点)、ポリープ (2 点) とスコア化し、合計を求めた (score of olfactory clefts, SOC_s, 0-20 点)。嗅覚予後因子を検討するために、2008 年 6 月から 2016 年 9 月 (8 年 3 か月間) の期間で当科にて Endoscopic sinus surgery (ESS) を行い、術後嗅覚を評価できた好酸球性副鼻腔炎 129 例 (Eosinophilic chronic rhinosinusitis: ECRS 群)、非好酸球性副鼻腔炎 48 例 (non-ECRS 群) を対象とした。嗅覚は、T&T オルファクトメーターを用いた基準嗅力検査の平均認知域値により評価した。日本鼻科学会嗅覚検査検討委員会案を用いて「改善群」と「不変群」に分け、多変量解析により、年齢、性別、喘息、血液検査、嗅覚検査 (基準嗅力検査、静脈性嗅覚検査)、呼吸機能検査、手術所見、SOC_s について、術後の嗅覚予後因子を検討した。

【結果】

改善群と不変群の SOC_s を比較すると、ECRS の術後 3 か月、12 か月群、non-ECRS 12 か月群で不変群が優位に高いスコアとなった。部位別に比較すると、ECRS 3 か月群では蝶形骨洞自然口、嗅裂天蓋、12 か月群では中鼻甲介、蝶形骨洞自然口、嗅裂天蓋が有意にスコアが高く、non-ECRS 3 か月群では上鼻道、12 か月群では上鼻道、嗅裂天蓋が有意に高かった。次に改善群と不変群における単変量解析で $p < 0.10$ の症例を用いてロジスティック回帰分析を行った。ECRS 3 か月群では、呼吸機能障害 (OR=3.084)、SOC_s

(OR=1.094)、ECRS12 か月群では、平均認知域値 (OR=2.266)、SOCs (OR=1.134) が有意な不変因子であったが non-ECRS 群では、短期、長期ともに有意な因子は認めなかった。

【考察】

SOCs は、嗅覚障害の程度と予後と関連しており、副鼻腔炎による嗅覚障害の病態把握にも有用であった。今後も副鼻腔炎の病態解析を行い、それに応じた治療を行いたい。